

## 【研究ノート】

ちようもう ふ

**明末清初の博古図—伝趙孟頫「故事人物図冊」  
（黒川古文化研究所蔵）をめぐって**

中国の知識人エリートである文人士大夫は、豊かな知識と古への敬慕のもと、書物を読み、書画を鑑賞・制作し、古琴をつまびき、古器物や奇石を鑑賞するなどといった風雅な趣味を行ってきました。そうした趣味を楽しむ様は、理想的な文人士大夫の姿を象徴するものとして、古くから「琴棋書画図」や「博古図」などとして絵画化されました。特に明(1368～1644)と清(1616～1912)時代には、民間における文人趣味の浸透などを背景に、こうしたテーマの作が多数制作されています。本稿ではその一例として、黒川古文化研究所が所蔵する伝趙孟頫筆「故事人物図冊」(絹本着色、〔各〕縦28.9cm×横22.4cm)という作品をご紹介します。

本冊は、中国の歴史上、とみに著名な収集家や芸事に長けた人物など十名が、文人趣味を楽しむ様を表した書画冊です。作者は、書画中の落款印章から、宋末元初を代表する文人である趙孟頫(1254～1322)とされますが、書画ともに趙孟頫の真筆とみなすことはできず、画の濃厚な着色や画中人物の面貌表現の特徴などから鑑みて、実際には明末清初(16世紀末～18世紀初)の蘇州で大量に制作されていた古書画の贋作、いわゆる「蘇州片」とみら

れます。明初(14世紀)には既に、趙孟頫の画風に倣う「琴棋書画図」(徳川美術館蔵)が成立していましたが、更に本冊の図様や付彩、人物表現、画冊というフォーマットは、16世紀の蘇州で活躍し、人気を博した画家である仇英の「人物故事図冊」第五図(図1、北京故宫博物院蔵)のような作品も参考にしたものと考えられます。

各図には対となる書があり、その中で画中の歴史人物についての話が語られています。それに従えば、描かれている人物はそれぞれ、第一図:春秋時代の孔子、第二図:北宋の蘇軾、第三図:南唐の李煜、第四図:元の袁桷、第五図:南宋の賈似道、第六図:北宋の米芾、第七図:北宋の王誥、第八図:唐の李德裕、第九図:北宋の李公麟、第十図:宋末元初の周密となります。対の書がなければ、誰が誰であるかを特定するのは困難な図が多いですが、その中でも一見してわかるのは孔子(図2)で、欵器という道具を使って弟子達に中庸の精神を教えた、有名な逸話を表していると知れます。構図は、当時の挿絵版画などにおける「孔子観欵器」の場面に近く、文雅の嗜みではなく儒教の教えを示す場面である点、他の図と趣を異にしています。この他にも、奇石

を偏愛した米芾(図3)は、中央の米芾らしき人物の背景にアーチ型の太湖石が配され、北宋を代表する士大夫画家だった李公麟は、皆で水墨山水画を鑑賞しているなど、各々の人物を特徴付けるモチーフが配された図もあります。また墨竹を善くしたという周密は墨竹図を鑑賞する様が表示されます。彼は趙孟頫の友人なので、本図の趙孟頫作という伝来と関連付けるための人選と推察されます。

一方で、画中人物が誰なのかを特定できるモチーフが特になく、博古図として普遍化された表現の図もあります。こうしたことは各図が、あらかじめ存在していた、定型化された汎用のきく「博古図」の図像を下敷きに描かれており、それに後から適宜人物名を割り振り、ときにその人物を特徴付けるモチーフを描き加えるなどして個性をとまわせた可能性を窺わせます。実際、本冊のいくつかの図と同じ構成を持つ作品が現存しており、李煜(図4)は、「博古図」(図5。「集古名画冊」第一図、台北國立故宫博物院蔵)という、南宋の画家である劉松年の落款をもつものの、より時代は下るであろう作品と概ね図様が合致します。また李德裕は、ほぼ同じ図様の、明末清初の蘇州片とみられる「高士玩器図」(「臥遊千里図画冊」第十五頁。清時代、唐招提寺蔵)が残っています。なお蘇軾にも、宋末元初の文人画家・銭選の落款をもつ「博古図」(「古画冊」のうち。明末清初、個人

蔵)という、やはり蘇州片とみられるほぼ同じ構図の作を見いだすことができます。このことは、当時における博古図の高い需要に応じて、図様を共有しながら、多数の蘇州片が制作されていたことを窺わせます。「故事人物図冊」も、その一つと考えられるでしょう。

本冊は蘇州片ではありますが、絵画表現は比較的丁寧かつ繊細で、高い観賞性を有しています。画中人物は、細筆と色彩によって柔和な表情や安定感のある姿態が表示され、画中の古器物や机、屏風、欄干、樹木なども、表面の文様や質感の描写を丁寧に表しています。また、李煜(図4)や賈似道(図6。画像は部分図)などの図に画中画として描かれた山水画も、墨の濃淡や筆線、構図などに明末文人の水墨山水を想わせる洗練された趣があり、携わった画工の技術の高さを窺わせます。以上のことから、明末清初に人気を得て生まれた博古図の一例として、本冊を位置付けることができるでしょう。

(都甲さやか)

※挿図1は、『世界美術大全集 東洋編8』小学館、1999年。挿図5は、『故宫書画図録』29、國立故宫博物院、2010年。挿図2～4、6は、執筆者が撮影したものを所蔵者の許可を得て掲載しました。



図1



図2



図3



図4



図5



図6

季刊 美のたより No.222

令和5年3月31日

発行 大和文華館